25周年記念特集号の発刊と会誌編集の方針

奥 田 聰

Satoshi OKUDA

本会が創立25周年を迎えるにあたり、その記念事業の一つとして本特集号を発刊することは、漸く25才の成人を迎えた学会の機関誌としてまことに同慶に堪えないところである。

四分の一世紀は確かに一人の人間の活発な仕事の期間に相当する長さであり、その意味において粉体工学という専門分野を曖昧模糊の中より育え上げ、今日のような明確な軌道に乗せた先覚者の情熱ならびにご努力にまず敬意を払うものである。とともに底辺が拡大しつつある粉体工学において若い新しい力の進展を感じ、また期待するものである。人間においては20代～30代において飛躍的發展をとげるものであるが、学術、技術の面においても然り。ある時期において飛躍的發展をとげるものであると思う。粉体工学が近い将来に若い人々の力によってさらに飛躍的發展の時期を迎えんことを切望するものである。

本特集号がそのような意味において過去をふり返り、未来を展望する一里塚となるならばと考え、本特集号を発刊する次第である。

さて学会誌が学会の最も重要な要（かなめ）であることに論をまたないが、我々編集委員に課せられた責務も重大であることを自覚し、ますますよい会誌づくりに専念しなければならないと考えています。

昭和54年度より編集事務局の名古屋から京都へ移転に伴い、編集委員会も新しい編成メンバーで活動を始めております。粉体工学研究会誌時代のよい伝統はそのまま受け継ぎ、さらに粉体工学会という新しい皮袋に芳醇な酒を入れるにはどうしたらよいかと編集委員は日夜頭を悩ましているところで、よい会誌づくりについての編集委員会の次のような意向を開陳して、皆様のご協力をお願いする次第でございます。

1. 粉体工学に関する質の高い報文のご投稿を期待しています。

学会誌は学術、技術の発展に寄与できる独創性のある研究報告を集録するものでなければならないことはもちろんである。しかし学会誌のレベルはそこに質の高い研究報告が集録されていることにより決まるといえる。質の上下については俄かに判断することは難かしく、今すぐ有意義な研究報告でなくても、後世いつの時代においてそれが役立つものであるならば、それはそれなりに質の高い研究報告といえる。

従って投稿の時点における研究報告の質の上下は専ら

投稿者のその研究報告に対するご自身の評価によって決まると思う。二番煎じにあたる報告をというのではなく、著者の最良のまた最も自信のある報告を本誌にご投稿頂きたい次第であります。我々はこのような投稿者が最も秀れた研究成果を発表するに相応しい魅力のある学会誌づくりをしなければならないと思っております。

さらに、会社・工場における最先端の技術に関する研究報告（ないし技術報告）を大いに期待しています。粉体工学は学問の性格上、スケールアップの問題、粉体プロセスとしての特性など現場への適用性が重要であることから、とくに会社・工場からの研究報告のご投稿を期待しております。これはまた粉体工学研究会誌時代からの本誌のよい伝統ではないかと考えております。

そのほか、独創的に富むが、しかしながら未完成の研究については“研究速報”あるいは“ノート”として積極的にご投稿されることを期待しております。また諸種の技術的体験、技術的資料、基礎資料などを“参考資料”としてご投稿頂きたい、むしろ粉体工学の会誌としての有用性は参考資料欄にあるのではないかと考えます。参考資料が研究報告にない魅力を持つようこの欄の拡大を計って行きたいものです。

以上述べたように学会誌としての使命を果たすためには質の高い投稿をということですが、それほど堅苦しくお考えにならず、粉体工学に関する研究成果ならば気軽に何でも投稿できる会誌であることを念頭しております。

2. 粉体工学、粉体工業の諸課題にお役に立つような一般記事の集録に努めたいと思います。

粉体工学・技術の関与する分野はますます幅広く、多岐の応用分野にわたるとともに、その基礎には、高度の合理性と精密性が要求されていることは他の工業とほぼ軌を一にするといえます。学会誌は当面する課題並びに将来遭遇するであろう課題に対して有効な情報を提供するものでなければなりません。このような意味で、これまでの情報を適確に集録するとともに、現今の技術・新技術に関する重要な情報を提供するものでなければなりません。

こまごまと私見を述べましたが、学会誌として魅力があり、親しみやすい会誌づくりを念願しております。皆様のご協力を切にお願い申し上げます。さらにまた、25周年の大きい節目に成長のあとを振り返るとともに、しっかりした根の上に生々とした青葉が繁ることを心から期待するものであります。

（同志社大学 工学部 教授、本誌編集委員長）